

御土はんのう

第27号



岩殿観音石龕窟 奥院(南北朝時代 県指定史跡)

平成18年5月14日改修工事が終り、落慶法要が執り行なわれた。
参道も新たに整備され、朱塗りの扉と銅葺きの屋根が目鮮やかである。(武蔵野観音霊場第三十一番 補陀山 法光寺 裏山)

目次

- ◆『飯能の幕末』発刊によせて(浅見徳男)・・・2
- ◆随筆 南川諏訪神社のお祭り(吉田敏子)・・・7
- ◆南高麗歴史散歩(久下文男)・・・2
- ◆随筆 えびす講(浅見初枝)・・・7
- ◆河童の話(深堀道義)・・・3
- ◆観音窟石龕・・・8
- ◆飯能の民家建築(熊澤孝之)・・・4
- ◆蘇るか『高麗』の地名
高麗郡を語る会結成への胎動(吉田 靖)・・・6

『飯能の幕末』発刊によせて

浅見徳男

飯能地域の長い歴史の中で、いくつか特徴的な事象や事件が記録されている資料が残されている。

従来の通史的な記述であれば、それを前時代の状況を受けて時間の連続の中で描くのが普通のことであるが、本書では個々の事件や事象を脈絡なしに、事実として並列に書いてみた。

郷土はんのう

秩父・多摩の山脈が徐々に標高を上げてきて、武蔵野平野がはじまる八高線沿いの地域を、江戸時代初期には「武蔵山之根」と呼んでいたようだが、この地域はその時代から特別な地域とっていかも知れない。江戸幕府は八王子に代官所を設け、その出先役所として青梅に森下降屋、日高に高麗陣屋を設置して政務・行政に当たらせていた。

できたことは、紛れない事実であろう。

幕末という時代を輪切りにして、この時代にこの地方で起こった出来事を、資料によって並べた方法でまとめたとが本書であり、前の時代がどうであったか、その後どうなったか後世の飯能の人達にどのようなつながって来たのかなど、論者は読者諸兄姉にお任せしたいと思っている。(飯能市文化財保護審議委員・理事)

南高麗歴史散歩

久下文男

「南高麗は良いところですね」とよく言われる。都市計画の調整区域で、乱開発から免れたことが幸いした。上知から西に向かい、直竹に入ることろに「日の出橋」があり、このたたりまは「桃源郷」の感ずらある。私の好きな場所の一つである。

南高麗の歴史散歩は「南高麗郷土史」を手にしたがら歩くのが良い。編集に携わった多くの先輩の汗の結晶である。郷土史の詳しいことはそちらに譲ることにする。

●地名の由来

今年一月「南高麗地区賢詞交歓会」

が地元福祉センターで開かれた。地域で活躍している企業家の人も参加した。地域のことを共に考える趣旨であった。その中の一人、樹木医でもある鶴田さんに南高麗の地名の由来を聞かれた。とっさには答えられなかった。彼は宮城県出身で、この地が気に入っての故木崎和三郎氏が記していたのを見ていたが、全文は頭の中に入っていなかった。和三郎氏は市議会議員、飯能市史編纂委員長も務めた名士である。ここでその由来を紹介しておく。

「それは明治二十二年四月十六日を目前に控えたある日こと、当時連合戸長宿谷半左衛門氏を中心に村名選択談義、議題は郡役所から天降った村名「直畑村」に不承知な岩淵村菊生村代表の強硬意見、も自村の名残りを新しむ村名の中へ盛り込むために論議百出、むろん酒肴もあり、夜更ぐるに及んで遂に座長の一任の議に決まり旧名に一切関わりが無い「高麗郡の南端にある故」とあって斯くは佳き名「南高麗」と相定め申候次第、とある。筆者はあえて朝鮮との連りをさくらずに訳をしたのでは更々無く否むしろ文中述べた通りの関係から血の中に生活力の強いものが有ることを誇りに思ふが、村名から来る直接の関係は、誤り伝えられているので、ここに拙文を献した次第である。」

●下畑三寺めぐり

次に、私の生まれ育った下畑を歴史散歩してみよう。今、ハタゴルフ場となっている所、地元では「尾根の山」と呼んでいる所、ころには縄文時代の「曾根遺跡」がある。その時代からこの地には人が住んでいたことになる。江戸時代を過ぎ、明治期の郡役所制度下では中間郡下畑村で、戸数は六十戸であったと思われる。現在は約百五十戸である。郷土史研副会長の内野さん宅の西側に、蔵が七つもあつたという吉澤家跡がある。菩提寺は「心王院」で門を入つたところ、高さ2メートルもあるりつばな宝篋印塔がある。施主吉澤氏の銘があり、すぐそれとわかる。墓所も間口が十メートルもあり名主級の家であつたことがわかる。並んで小嶋家(ハタゴルフ、当主小嶋家幸氏)の墓もあり、ほぼ同じ大きさである。現当主の曾祖父は第六代南高麗村村長を務めた「小嶋定吉」である。宝篋印塔は供養塔であり、五輪塔と並ぶ石塔の建立背景について、飯能市教育委員会編「背能の石塔―浄土への道標―」に詳しく解説されている興味深い。南高麗には中世のもの、近世のもの、十一基があり、調査報告されている。宝篋印塔や五輪塔をたずね歩くだけでも、一日たっぷり使った歴史散歩が計画できる。ちなみに飯能で最古の宝篋印塔は、岩沢見光寺のもので、千三百年代、今から約六五十年前に造立されたものと思われる、市指定文化財になつ

ている。

わずかに六十戸の集落に寺が三つあり、その寺にまつわる話がいくつかある。真ん中のお寺「遍住院」は下(しりも)のお寺「心王院」と同じ真言宗で本寺は青梅市成木の「安楽寺」である。クリンセンターを南に下った左側にいる。ここに戦中戦後の一時期、日本を代表する国文学者「昭和完訳源氏物語」を草稿した五十嵐力文学博士の夫人が住んでいた。名は「若菜」、仕舞、茶道をたしなみ、日本女性の鑑、大和撫子そのままの人であったと多くの人が述懐している。地元の人でも覚えていた人は少なくなつたが、ある時、地元郵便局に来てたかと思つたら、瞬く間に一文をしまったためと溢れんばかりの教養を感じた、と馬場健一さんが話していた。

上(かみ)のお寺「金蓮寺」はこの辺では珍しい「時宗」のお寺で、旧道知トンネルを下った正面にある。ここには、飯能戦争の時の、筑前兵に撃たれて死んだ二人の若者の墓がある。馬場綱吉(二十歳)松吉(十二歳)である。弟松吉は悲しくも戒名こそ「池田童子」、時に慶応四年五月二十三日、振武軍の一員と間違つて撃たれた罪もな

い平民の犠牲者であった。

●下畑の屋号

「食う寝る所に住むところ」、昔

は皆その土地に張り付いて生活していた。道は皆、山や川沿いであり、良い条件の土地は田畑にした。下畑を東西に貫通する県道も昔から見れば三本目である。古道に立ち、昔人の交通を思い起こすのも歴史散歩だ。格好の場所「石橋」がある。旧道はパレストラン「グレン」の南側から西に続いていく。残念ながら石橋は今も無く、さらに西に進んで残っている。敷地に移されて残っている。大きな自然石と長細く切り出した石である。代々郵便局を営む小幡家は屋号が「石橋」で昔の錠口、保入沢(ほにいさわ)の端に石橋供養塔が残っている。その隣の家は屋号が「よいと」、美輪明宏の「ヨイトまけの唄」はあまりにも有名だが、そんな有名な唄を連想させる屋号はよいと思うが、どうも家人は気に入ってない様子。先代は近在でも有名な腕の良い大工の棟梁で、多くの弟子を育てた。家業がらして「よいと」はやはり地固めをする土建、建設業に関係していると思われる。下畑に屋号は三十余り、謂れを解いて見るとおもしろい。

例会でお話ししたことは、お祭りが中心であったが触れないまま筆を置くことになる。お祭りの朝に行なわれる獅子回しの神事は、これも教育委員会編「飯能獅子舞」に詳しいので、そちらをご覧ください。できれば幸いです。

(前郷土館館長・会員)



下畑・心王院の室印塔

河童の話

深堀道義

河童、鬼、天狗、狐、狸、お化けなど、日本の小供ならば誰でも知っている妖怪変化は、小供ならずとも面白く探ってみたいものである。童心に戻れると共に、熱中させてくれる何物があるから、首を突っ込むと止められない。とは言っても、七十歳を過ぎてから河童の仲間になれるとは思っていません。

●河童との出会い

私は作曲法を独学で修めていたので作品を発表する機会を得たと思つていて、もう七十過ぎだし音楽界には誰一人知る者も居ないのだからと諦めていた。ある会で作曲家の中田喜直氏と語る機会があり、

「童謡を作りたいが良い詩にめぐり会えない」と言ったら(社)日本童謡協会への入会をすすめられた。同協会ではプロの作曲家と詩人の団体であるので、思わぬことと一足跳びに作曲家になってしまった。飯能には協会の作詞会員である野口家嗣さんが居られるので会うようにといわれた。

野口さんのお顔は銀座通りで見かけることはあったが初対面であった。非常に若く見えたので、「昭和何年のお生れで」と聞いたら、「三年は三年でも大正です」といわれ驚いた。野口さんが語られるのは「飯能へ来る観光客は、飯能河原止りです。もつと上流へ誘いたい。それには名栗川沿いに河童の里を作るのです」。

そして全国に在る河童村について語られた。この近くでは、鈍子河童村の村長は元鈍子市長であり、国内でも有数な活力のある河童村として知られているので、訓を受けに行った。五十年前に野口さんが書いた「月夜の河童」という詩が歌になり、レコード化されているので、私にも作曲してほしいとのこと。野口さんは「河童百題」という詩集を作っておられたので、その中から河童の生から死までの十二編を選んで童謡組曲「かっぱの踊り」と、踊りを振付けた。かっぱの踊り」を作りCDにまとめて上げた。私としても作曲家として初の仕事であった。

「緑と清流」に河童を絡ませようと

平成十一年に「飯能市地域づくり事業」としての認定を受けた。

●飯能地方の河童

野口さんに会うまでは、河童は頭に皿があり甲羅を着ていることぐらいいし知らなかったが、民俗学的には千年の歴史があり、へその有る無し、即ち動物学上では胎生か卵生かが論議されているとは知らなかった。それはさておき、飯能地方の伝説も「鯉ヶ久保池の河童」「下畑の熊さん」と笹井「河童」は既に市報にも紹介されていたし、「中藤上郷磯前神社の河童像」は新たな研究対象になった。

郷土はんのう

河童は水でつながっているから、飯能周辺の河童伝説を調べることになった。県西の十五市町村は行政として密に連絡が有ること故、生涯学習課を通して照会してもらった。

笹井（入間川）の竹沢、川島村（越辺川）の親家坊、所沢（柳瀬川）の曼陀羅は親分子分の関係にあり、毎年中元には人の尻子玉（尻の穴から手を入れて引抜いたはらわた）を持って行った。だから人はお盆の前後十日は水辺に近寄らないようにした。恐らく越辺川の玩信坊（坂戸）や平四郎（越生）もその仲間たちであったに違いない。

私は旧名栗村役場からの返事を心待ちにしてはいた。というのは磯前神社の河童像は江戸時代に名栗川での砂鉄の採取に関係があるようなのだが、返事は「伝説はあったようだが今は解らない」とのこと、些かがつ

かりした。

鎌倉中期には砂鉄からのたたら製鉄が行なわれ、鉄砲の製造に用いられたとき、領主らの目を防がねばならないから頭またちは、あそこには河童が出るから近寄るなどの触れを出していたのである。当時は河童は怖い生き物だったのであろう。

●人間の河童界の動き

日本全国には河童村とか河童共和国などが百有余あり、様々な活動をしている。その活動は大体次の三つの系統に分けることができる。

一、民話、伝説などを調べ、その地方の河童の歴史などを研究する民俗学派。

二、河童は汚れた水には棲まないとの仮説を立て、川をきれいにしようという運動を起し、同時に子供達を外で遊ばせようとする環境学派。

三、河童グッズを作ったり集めたり、各地の河童仲間との交流を楽しむ大人のメルヘン派。

この三系統は互いに重複しているがそれぞれ分野で成功している団体は少なくない。わが「奥武蔵かっぱの里作り会」は少人数で調査から入ったので、現在でも河童の話をしつたり、「宮沢湖の河童」のように民話を創作したり、その紙芝居をやつたりするような地味

な存在である。

しかし、初めの頃は、名栗川上流まで観光客を引入れるために、川沿いの河童像を置くこと、土産物の河童饅頭や河童最中の話題などもあがっていた。しかし、その事業を実現させるには我々は余りにも非力であった。全国の状況を見ても、観光資源にせよ、水浄化運動にせよ、自治体が動いた所が成果をあげているようである。やはり我々ができるのは(一)の分野になるであろう。

けれども河童はいつも夢である。こちらが思うような形になって現れてくる。

河童の尻が臭ければ、敬遠もされようが、胡瓜を食べているので仄かな香りがするらしい。

(作曲家・会員)

江戸時代の河童



百鬼夜行図巻より「利根川国志」より

飯能の民家建築

熊澤孝之

●民家とは？

今回お話しする民家とは、職・住が一体であった時期の建物、凡そ戦前期までの建物を指します。一概に民家といってもその種類は様々です。大きく分けると農林業を営む広い土間のある建物(農家住宅)市街地に多く、商店などを営む建物(町家住宅)に分けられます。この中でも特に町家住宅は種類が多く、店蔵・洋風建築・看板建築・長屋建築などを挙げることができます。

現在飯能市内に残されている民家の数は、6200件程です。この内農家住宅の母屋はや蔵が400軒弱、町家住宅が120軒弱、残りは一般住宅になります。

●建築と大工道具の進化

建物の建築に切り離すことのできないものに、大工道具があります。日本建築の進化の歴史は、そのままた大工道具の進化の歴史になります。そこで代表的な大工道具の「チョウナ」と「ヤリガンナ」「大鋸と台鉋」について見ていきたいと思えます。材木を建築材にするためには、古くは木を割つたり削つたりして製材

し、角材や板材にします。その際に使用する道具が、チョウナやヤリガンナです。どちらの道具も歴史は古く、古墳時代には存在していました。当時の加工は、木目の通った杉や絵を使い、木目に沿い木を削り、割った面を削るというものです。

まず割った面を平らに成型するのがチョウナです。チョウナは歯の形は真っ直ぐな平歯と曲線の蛤歯があり、近世以前までは、蛤歯ですが、近世になると平歯が入り始め、徐々に変化します。次にチョウナで成型した面を平滑に仕上げ上げるのがヤリガンナです。この道具の形状は古い時代からほとんど変化していません。現在でも社寺建築の仕上げには使われています。ヤリガンナは、チョウナでできた凹凸の凸部を削ることで面を平らにする道具です。

製材方法の一大転機と言えるのは、大鋸の出現といわれています。大鋸とは、材木から角材や板材を切り出す鋸のことで、縦挽鋸とも呼ばれます。この大鋸の出現は、現在でも諸説ありますが、少なくとも十五世紀にはあったとされています。大鋸の出現で建築材に使用する木材の種類が増え、効率よく柱等を生産することができるようになりました。これに時代を合わせるかのように台鉋が平安から鎌倉時代に出現しますが、当初工芸品等に限って使われていました。台鉋の形になり建築に使用されるのは、諸説ありますが室町中期から江戸初期といわれています。

このような道具での加工痕跡を調べることで、実際に民家の材を検証し、建物を説明する大きな手助けになると考えます。

●飯能の農家住宅

飯能で農家住宅の変化に最も影響を与えたのは、養蚕です。多くの農家は養蚕をより効率よく行う為に、建物を改造して建て替えをしました。この地方で養蚕が盛んになったのは、江戸後期からと言われ、明治の大正期が全盛期です。全盛期には、養蚕の方法も変化し、それに伴って建物も変化しました。

飯能地域の農家住宅は、十六〜十七世紀、古四間取と呼ぶ、土間に面した前室が3間×3間と広い、四間の建物でした。この後、広間形と呼ぶ、土間に面して広い一室をもつ三間の建物が分布します。全体的にはこの型が主流となります。前面の二間と奥の二間の大きさが大きく違うものほど古い型式と言えます。四間取の建物になると、上部の構造が平屋から2階建てに変化するようになります。この変化には、これまで屋根裏で行っていた養蚕が、風通しと密閉が必要な飼育方法、人工的に温度や湿度を管理して飼育する方法に変化したことによります。その為、屋根裏でなく、窓がある居室としての空間が必要になり、建物の高層化へとつながっていきます。

その後は平面的な広がりとしての六間取や八間取、高層化としての3階建て等へと変化していきます。こ

の変化の原動力は、いかに多くの蚕を育てる広い空間を確保するかということでした。

●飯能の店蔵

店蔵とは、店舗と土蔵が融合して江戸時代中期に日本橋が中心となつてできあがった建築様式です。現在飯能市内には六棟の店蔵が残され、その全てが以前「純市」の間かれた通りに面しています。市の町として発展してきた飯能のまちの生き証人とも言えます。

飯能のまちは通りに面した建物が敷地の境界少し奥まったところに建てられる特徴があります。その空いた空間を前庭空間と呼びますが、現在でもこの空間が残されているのが銀河堂です。前庭空間は市日には店が建つ場所として利用され、個人所有でありながら公的な市空間にもなるといふ空間でした。その後市衰退とともに土地に対する意識変化から、前庭空間が無くなり、敷地の際に店が建つようになっていきます。

店蔵の店先(下屋)の構造もこの意識変化を受け継いでいることがわかります。明治初期に建てられた店蔵は、下屋に屋根だけを掛け、両側に壁は造りません。少し後では、屋根の他に両側に壁を付けるようになっています。隣の店とは下屋の下でつながっています。この壁により少し個人が意識されたものと考えます。

明治中期頃からは、下屋は完全に建物の一部となり、構造も本体と同様に変化します。この段階では、下屋



は公に空間としての機能は無く、店の一部として完全な個人所有地へと意識が変化したことをうかがわせますが、「鍋釜」はその代表と言えるでしょう。

(飯能市教育委員会・文化財担当)



蘇るか「高麗」の地名

高麗郡を語る会結成への胎動

吉田 靖

〔高麗のこきし(王若き光の導き)にむきし大野は開けそめけむ〕

この和歌は早稲田大学教授で国文学者として著名な五十嵐力博士が高麗郡を起し高句麗王国からの渡来人、高麗若光をしのんでうたったものである。同じく江戸末期から明治の国学者、権田直助も詠んでいる。

〔高麗川の流れをくみてありなれば源遠き君でゆかしき〕

その郷土の歴史の源をかざった「高麗」の名称も時代の流れのなかで今では消え去りつつあるように思える。かつては飯能や日高付近は「高麗郡」という行政区だったし、「高麗川」や四十年前までは高麗村とか高麗村などの公的地名が生きていた。しかし相次ぐ町村合併などでそうした地名も消え、今や僅かに川や駅名で残るのみとなってしまった。

なにか郷土の歴史が地上から抹消されてしまうのではないかと、このえなく寂しく思っていた矢先、高麗神社の神官、高麗文康師からのお手紙が届いた。「高麗郡が創設され、あと九年ほどで三〇〇年となります。そこで旧高麗郡地域の郷土史関係者にお集まりいただき「高麗郡を語る会」準備

会を企画、開催したいと考えてますのでご出席を」とのこと。これはど時宜に適した企画はあるまい。喜んで出席させていただくことにした。

さて奈良朝廷が甲斐、駿河、常陸、上総など関東周辺七カ国に点在していた高句麗渡来人千七百九十九人を武蔵国西部地域に移住させ、その地域を「高麗郡」としたのは霊龜二年(七一六年)だったと国史「続日本紀」に記されている。高麗郡の地域は日高、飯能全域(吾野、名業は江戸時代に秩父郡に編入されたという)と鶴ヶ島、狭山、入間、川越の一部分、合せて百二十ヶ村ほどで郡としては比較的小さな地域であった。郡長は高句麗王の血筋とされている若光が任命された。

高句麗王国(高麗王国とは別)は西暦前後の約八百年間、朝鮮北部から中国北部、ロシア沿海州にまたがる広大な地域を治めていた。五世紀ごろ近隣の漢(中国)新羅(朝鮮)連合軍に攻め立てられて滅亡したが、この戦いと前後して高句麗王は日本に使者を派遣、奈良朝廷に救援をもとめた。その際の使者の一人が若光だったとされている。

若光は朝廷から王(こきし)の姓(かばね)を許され、新任地において在来人と渡来人の融和をはかり、農耕、蚕桑、陶器等々、未開の地の開拓をすすめたとされている。王若光の卒後、郡内住民は

その人徳をたたえ、高麗神社を創建祭神とし、近くに高僧らによって巨剎、高麗山聖天院も建てられた。その後高麗神社は若光の系統「高麗」氏によって守られてきたことは知られたとおり。

建郡千三百年を前に高麗神社では現在、高麗神官を中心に横田繪学芸員らが数年前から「高麗郡建郡千三百年記念事業」として膨大な高麗関係資料、高麗神社の歴史的资料、等々の収集や取りまとめの作業を続けており、今回がその第一段階としての「高麗神社・高麗家文書目録」(652P)を刊行している。

そうしたなか、ある高麗武蔵台団地住民から「高麗郡の歴史を消し去ってはならない」との提案を受け、日高市郷土史研究家として知られる横田八郎氏を取りまとめ役として「高麗郡を語る会」の設立へ向け動きだしたのも、四月末準備会を開催する。準備会には地元の日高、飯能はもとより鶴ヶ島、狭山、入間、川越の旧高麗郡下の郷土史家が集まり意見を交換するという。

考えてみると、高麗郡は奈良時代の創建に始まり、明治十九年に入間郡への編入により廢郡になるまで実に千二百年の歴史を記してきたのだが、廢郡により「高麗」はしだいに住民の脳裏から薄れつつある。ただ墓地には「高麗郡〇〇村」と彫られた墓石が少なくないことが「高麗郡」の存在を教えている。



「高麗郡を語る会」が正式に発足し、そこに隠された進んだ大陸文化と開拓による人々の足跡が少しでも掘り返されるとしたら、それに起す喜びはない。「会」の設立を期待するとともに高麗神社の記念事業の成功を祈念したい。

(副会長)

〔随筆〕

南川諏訪神社のお祭り

吉田敦子

八月十七日は、南川諏訪神社の例大祭だった。疫病や災害よけの祈願祭(願毘社)というが行なわれ、獅子舞が奉納された。この神社は約七八〇年も前から人々に崇敬されてきている神社だそうである。

小さい頃から獅子舞に興味のあった長男は、高校一年生の時から笛吹き仲間に入れてもらった。テューブとって節を覚え、先輩の指の動きを見たり、いろいろ教わりながら練習を見た。小、中学生も何人か習いは、笛吹きの多い年もあったが部活などでは今年来れなかつたりして去年は郷土大会は四入しなかつたという。三年前に結婚し、千葉市内に住んでからも長男は、八月十七日にはお嫁さんと二人して休みをとり笛吹きに戻ってこない二人だが、お祭りを口実に休みをもらって来るので、私とお親にとっても、お祭りはうれし楽しい日となつて。笛を始めてから十三年目の今年音もだいぶ良く出るようになって(そのうちお嫁さんも笛を習えばよいの)と思つている。

例大祭の前日、八月十六日の夕方四時から「宵宮祭」が行なわれ、その時に「種銭」という風習があるこ

ことを祭典役員の人Aさんから伺つた。これは、祭典役員、獅子舞、地域の人などが社殿の周りを奇数回まわる。それを「お百度参り」という。その前に、神前へお賽銭を参列者全員があげる。金額はそれぞれ役員があげ「お百度参り」が終わると役員がお賽銭箱を横にして、その上にお賽銭を並べて積み上げる。全体の額をすばやく数え、そこに集まつている人数で割り、全員に同じ額のお金を配る。これを「種銭を受ける」という。例えば、三十円あげた人も百円あげた人も五十円ずつもらしたと考へてはいけない。「私は、今年はいろつあつて三十円しかあげられなかつたが、来年はもっとたくさんのお賽銭をあげることができるよう、がんばつて働こう」と考へる。またある人は「私はこの一年けがや病気をせず、仕事もうまくいって百元あげる事ができた。来年もこれ以上たくさんあげられるようがんばつてお諏訪様にお礼参りに来られるようにしよう」と考へるのだという。地域の人たちがお祭りのお賽銭を分けていただき、これを「種銭」として、働いていく意欲を起ささせるのだらうか。(種銭もお賽銭を一人占めせずに分けるなんてずいぶん欲のないえらい神様である。)

この南川諏訪神社には、社殿正面に魚や社にはおもしろい。昔の人の憧れだらうかなどと地域で話題になったとのことだ。

そのほかに、奥の院の岩穴や池に入つたりさわつてはいけないとか、さまざま近年行事に昔から続いて守られていた言ひ伝えがあるという。六月二十九日は地元の子ガヤを使つて作られた「茅の輪くぐり」、昔も地形を川に流して「大祓式」など、私も地元人間として、地域の言ひ伝えや風習など調べてみたいと思つている。(全員)

〔随筆〕

えびす講

浅見初枝

一月二十日はえびす講だ。座敷にえびす様を飾りながら「朝そば切り」に昼だんご、夕さんまに米の飯」といってえびす様は働きの者が大好きだから一生懸命お供え物をこしらえて、食べてもらひ稼いでもらおうな」と夫の祖母がいっていたのを思い出す。ところでえびす講用のさんま、昔は鯛とともに当日に向けて新聞に折り込みチラシが入つたり、スーパーにも特設コーナーがあつたりしていた。安易に考へて、前日十九日にTストアに行つたらさんまがないのだ。別の店で探して用意した。

にはお札の気持ち込めを込めて御馳走するのだとか。商家では盛大に行なわれたと聞いて。魚も鯛が多かつたらしいが、山里の私の家はさんまの開きを半分折つて生のような姿にしてお供えしている。鯛ほど豪華な生活でなくても、さんまくらい普通の生活でできればよいという意味があると聞いたことがある。茶の間にえびす様を祀る棚がある。そこに木で作つた社の内木彫りのえびす様、大黒様が仲良く入つているのと、それより古そうな木彫りの小さなえびす様、大黒様が三組、さらに昭和四十年頃に縁起物を売りにきた業者から求めたらしい、焼き物のえびす様と大黒様が一つになったものを祀りしている。毎朝お茶を供えているが、えびす講の日は座敷にテーブルを広げ、全部のえびす様、大黒様をお飾りし打ち出の小槌や神も添える。「朝そば切り」というが私の家では朝が高盛りの米のご飯(赤飯や小豆飯の家もある)とみそ汁、お頭つゆの生さんまの二組を御神酒とともに供える。「昼だんご」は何か丸め物を作るという、りんとんで大福を作つて高盛りにし、りんごやみかんも供えて、夕飯にはそばかうどを打ち、やはり高盛りにして汁に薬味を添えて二組を供える。現在はえびす講を行なわない家が多くなつたようだが、庶民が腹一杯米の飯が食べられるようになったのはまだ四十年余りのこと、この幸せが続きますようにと祈りたい。(全員)



観音窟石龕

吾野法光寺の裏側より石灰山に登ること500メートル、頂上近くに自然にできた石灰岩の洞窟がある。石龕は緑泥片岩で囲まれた方形

の厨子で、石門と石柵をめぐらした仏教遺跡としては類例の少ないもの、窟内には多数の板石塔婆がのこされている。貞治六年(一一三六)などがある。中央の十一面観音像は香取秀真氏鑄造のもの。

飯能郷土史研究会の活動

◎平成十八年度事業報告
▽総会 四月二十三日(日)
講演会

「埼玉県の災害碑の調査から」
講師 高瀬 正氏

▽例会 (小川町文化財保護審議委員)
●六月十七日(土)
「南高麗の歴史散歩」
「お祭りを中心にして」
講師 久下文男氏
(前郷土館館長・会員)

●八月十九日(土)
「河童の話」と紙芝居、宮沢湖の河童」
講師 深堀道義氏(作曲家)

●十月二十一日
吾野法光寺と岩殿観音石龕窟の見学
案内 坂口和子氏(会長)

●十二月十六日(土)
「飯能の民家建築」
講師 熊沢孝之氏
(飯能市教育委員会生涯学習課)

●二月十七日(土)
「材木の話」
岡部材木店で木を見ながら
講師 岡部知子氏
(飯能市文化財保護審議委員)

(住宅建築研究家)

●三月三十一日
郷土はんのう二十六号発行

◎平成十九年度事業計画
▽総会 四月二十一日(土)
講演会

「民俗から見た飯能」くらしうた、芸能」
講師 小野寺節子氏

▽例会 (国学院大学講師)
(飯能市文化財保護審議委員)

●六月二十三日(土)
「飯能の幕末」
講師 浅見徳男氏
(飯能市文化財保護審議委員・理事)

●八月
見学会 甲府周辺

●十月
特展「西川林業道具展」郷土館事業
協賛

●十一月
私の「歴史観」
講師 吉田 靖氏

●十九年二月
(郷土史研究会副会長)

●三月三十一日
郷土はんのう二十七号発行

●新入会員
深堀道義氏
よろしくお願いたします。

当会理事として永年「ご協力頂きました中村好男氏が二月二十七日に逝去されました。
慎んで御哀福をお祈りいたします。

郷土はんのう 第二十七号
発行日
平成十九年三月三十一日

発行所 飯能郷土史研究会
〒357-0035 飯能市中藤上郷四一三

電話九七七一〇六五四
(岸道生方)

印刷所 大野邦弘
題字 (有)ビイ・ユースフル